

園田海未ちゃんとの○
○

AQUA BLUE

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

園田海未ちゃんが恋人だったら——という願望的IFを前提に、イチヤコラ(?)するお話。

目次

本編

1. 園田海未ちゃんとのモーニング 1
2. 園田海未ちゃんとのイブニング 8
3. 園田海未ちゃんとのランニング 18
4. 園田海未ちゃんとのエアホッケー 24
5. 園田海未ちゃんのお昼過ぎ 31
6. 園田海未ちゃんとのアフタヌーン

7. 園田海未ちゃんとの耳搔き 37

42

8. 園田海未ちゃんとの土産作り

54

9. 園田海未ちゃんとのレイニーデイ

67

ボツ話／番外編

1. 園田海未ちゃんのおしくらま

んじゅう

72

本編

1. 園田海未ちゃんとのモーニング

意識が曖昧なのをいいことに、睡眠時特有のふわふわした感覚に身を委ねていたら。

「朝ですよ」

凜とした声音が、堕ちている感覚を遮った。

「……………」

あえて無言。数時間くるまり、共にした掛け布団ぬくもりはあまりに手放しがたい。

「やはり、ですか……ならば仕方ありませんね」

小さな呟きを聞いてハツとする。またやってしまったと。緩く稼働し始めた思考で後悔するも、抵抗を示してしまえばもうあちらに容赦はない。「はっ!」……という妙に気合いの入った掛け声とともに、纏っている休養の繭が下地ごと剥ぎ取られた。敷き布団でだんご虫みたく転がる図になつては、降伏せざるを得ない。

「……………んんんん」

「あなたはこうしなければ起きないんですから、まったくもう……おはようございます」
寝ぼけ眼をこすって身を起こせば、エプロンをした聖女がいた。腰あたりまで届く口
ングヘアーと琥珀色の瞳。きりとした眉・薄くも健康的に潤った唇。

元スクールアイドル、園田海未。かくかくしかじかあつて出会った、恋人。

「休日なんだけども」

「だからといって、このまま眠り続けていいという理由にはなりません。あと寝癪、ひどいですよ？」

まだ開きにくいいため半目で彼女を睨み、して返ってきたのは温かい視線。あまりにも
迫力がなかったようだ。ほっとけ。

「さ。早いこと着替えて、それから食卓に来てくださいね」

くるりと背を向け、立ち去ろうとする海未。ここでまた眠ってやるのは愚策か。もう
起きるしかない。

「海未はどうすんの？」

「何言ってるんですか。そんなの……」

「見てないところで昔のボーリングでも思い出したり？」

「な……」

「ぼーん、って」

「~~~~つ……」

「ぼーん！ ぼーん！」

「いい加減にしなさいああい!!」

ので、カウンターは忘れない。

「……それにしても」

「なんです？」

「あんなおちよくりがまだ効くとはね」

「っ、くだいですよ」

「負け惜しみかい？」

「はあ……」

大人げない攻勢にため息をつかれる、そんな休日食卓。時間こそもう正午まで二時間というところまでできているが、並ぶ品は焼き魚サラダ白米味噌汁等々……実に模範解答的に整っている。

「卵焼き……一個多いね」

「だって、好物でしょう?」

「海未いい」

なお、さりげなくお気に入りに入りメニューの量を増やしてくれている海未に感動を覚えたことは少なくない。今日とて例外じゃない。

「最高かよ。あああ、よくを言えばあと二個くらい……」

「それ以上は栄養バランスが崩れます」

しかし、駆け引きはここからだ。

「いっぱい食べる君が好き、という名言がだな」

「困った人ですね……。わかりました。私のをひとつあげますから、それでいいですか?」

「素敵な女性から食べ物を奪うほど落ちぶれちゃいないさね。やはり夕飯を楽しむに待つとするよ」

「すて……!!こっ今回は騙されませんよ!?!」

「嘘だったら一緒に生活なんかできてない」

海未氏、ぷるぷると体を震わせている。ストレートな称賛に強い耐性を持たない彼女は、もう口元を緩ませかけていた。隠しているつもりなのか、まだ少し結べているけれど。

「あー。思えば、普段こっちばかり増やしてもらってるしなあー。たまにはどうよ、差し上げるよ?」

「……そんなの、不公平です。せつかく増やしたあなたの分が、なくなってしまうじゃないですか」

箸を置いて、海未はおもむろにキッチンへ向かった。露骨に顔を見せないようにして。

(勝ったツ! 卵焼き大増量確定!)

「作ってくれるの?」

「いつもいつも……ずるい」

最後の方は尻すぼみに言いながら、冷蔵庫から卵を取り出す彼女。チョロいな、なんて囁きはもはや届きはしない。

さて、さらに後ろから攻めてみたらどうなるだろうか。一周回って張り手でも飛んで

くるだろうか。久しぶりにやってみよう。忍び足で背後に迫り、安全確認をして。抱きつく。

「ひゃあっ!？」

相変わらず華奢で、柔らかい。シャイな海未からしたらおおよそ破廉恥とみなされるであろう感想を胸にしまいこんで、待機する。

「……………」

返事はなかった、というよりフリーズした。

「おーい？」

「……………」

やりすぎたか？ 俯いていて表情はわからないものの、どうやらまずい。

「し、失礼しました〜」

本気で怒られないうちに食卓側へ戻ろう。一歩さがって素早く背を向け――

「油断しましたね！」

なんと自分の腰に手が回っていた。勢いに押され、前のめりになる。

「私だって学習しますよ」

「……卵焼きは？」

「さあ、どうしましようねえ。あなたの反省度次第ですが……」

なんてこった、やられた。捕まってしまえば逆転は簡単じゃない。なおかつ。

「ふふ、しばらくは離してあげません」

海未は抱きとめる力をこれでもかと強め、意地悪な笑みを浮かべている。

卵焼きは、まだ食べられそうにない。

2. 園田海未ちゃんとのイブニング

夕飯食い、風呂あがり、歯あ磨き。夜闇が世界に馴染んだ頃に、

「せいやつ！」

布団のありがた、もとい押し入れを雑にスライドさせるのはもう慣れっこなもので。

「またそんな開け方して！」

「あーやらかしたごめん」

まっこと正論を唱えられるのも慣れっこなもので。

「10の指で数えられないほど聞きましたが」

「スライドすんのが最速だべ」

「む……………」

「……………もうしません」

「次こそは許しませんよ?」

謎の理屈を振りかざしてみても、有無を言わさぬ眼光に屈するのも慣れっこなもので。

わーわーしながら各々二つの布団を敷き、やがて眠りにつくのも慣れっこなも……

「これは……?」

「ちよつと海未さんや、心の声を遮らないで」

「いや、実は敷き布団が破れていて」

「ほう」

ささやかな牽制も虚しく、海未はすっかり下地に集中。凝視する彼女に便乗し、後ろからのぞきこめば——確かに、ふちの方が5円玉分の丸部分くらいはげて中身が見えている。

「あちゃー。いつできたし」

「不覚です」

ただ、広がりはかなり小さい。自分はもちろん、しつかり者の海未ですら今の今まで気付かなかつたくらいなのだ。転がるだの畳むだのしている間かは知らないが、ひよん

なことのできたのだろう。珍しいこともあるもので、今宵はほんの少しアウトローっぽい。

さて、気を取り直して寝るとしよう。

「海未さんやい。ひとつ、いいかな」

「なんででしょうか？」

「何故我々はひとつ布団の下にいる？」

「ひとつ屋根の下、みたいに言わないでください」

「せっかく動揺を隠したつもりなのにぶっ壊さないで」

「知りませんよ……しかも、隠したつもりと明言してしまつては意味がないのでは」
「ちがいないえや」

寝るはずだったのだが。

見事にふたりがひとつに。……なんとなく卑猥だから言い直す、布団ひとつをふたりで。うん、救えない。

平然とやりとりしている、とお思いか。とんでもない。ハートのビートは爆発寸前だ。お互い胸に耳を寄せたなら、おそらくどつくんどつくん鳴っている……あ、あその手があつた！

「海未。ちと失礼するぞ」

「は、はい」

ちよつともぞついで、被っている布団に頭ごと深くもぐる。そして鮮やかに海未のパジャマへ、詳しくは胸元へダイブ——よし。

「ふああああつ?!」

「ぶっへえああ!!」

合法ではなかったそうで、反射的神速ピンタいただきました。命名わたし。

「あ、あつ、あんまり驚かせないでください！」

「発端は海未氏じゃないですか……」

「それとこれとは話が別です!!」

「ひどい！ 生殺しだ！」

そう。元々は破れた方をとりあえず男サイドぼくが使う、ということはいこうとし

た。実際全然気にならない程度の綻びだし、当初の案で解決できたはずなのだ。が、海未のひとことで状況が変わったのである。

『や、破れてしまつては仕方ありません……』

一緒に、眠り……ましよう』

『異議なし』

耳まで赤らめた彼女からしりすぼみに発されたお誘いに、秒で頷いたのは記憶に新しい。

……基本的に恥ずかしがり屋な海未だ、こうなるのはなんとなくわかっていた。ゆえに衝撃はない。第一、彼女とぐだぐだと騒ぐのが素晴らしいひとときだというのに変わりはないのだから。

「一緒に寝るつてゴースサインじゃないのか！ 海未に飛び込みたかつたのにい！」

「清々しいくらい直球ですな……」

矛盾？ 嘆き？ なんのことやら。

必死の訴えも空振り、一周回つて呆れたようになる海未。ドキドキなシチュエーションになるだけなつた挙げ句、こちらがクソザコヒールな感じで終わりそうになつてい

る。さすがに不服だ。はじめ布団に入るところまでは何かが起きそうな緊張感があつたのに、彼はとつくに行方不明だし。諦めるわけにはいかない。

「こういうのはどうだ」

「ダメです」

「まだ何も言つてないよ!?!」

つんと顔をそらす園田海未。一見可愛いつつけんどん、しかしそんな彼女のファンシーげなガード、とても崩せる気がしない。

「再ダイブ！ ハグ！」

「却下！」

「せめてひざまくら！」

「同じく却下です！」

「ぐぬぬ、じゃあ手繋ぎ！ 指切りげんまん！ ユーフトモモグッドプレイス！」

「却………つてどさくさ紛れて何を！」

ついには枕を振り上げさせる始末。なんとか妥協案を探り当てたかつたものの残念、彼女の柔弾道を放たんとする腕を支えるので手一杯になつてしまった。

「ふふ、すごい力だな」

「あなたの鍛練不足ではないのですか？」

「海未が強すぎ……いえ、なんでもないです」

「このつ、言わせておけば!」

「ヒエッ」

返せば返すほど、海未の頭に鬼の角でも生えてくるようだ。まさに修羅場。傍からしたらイチャイチャしているかに見えるだろうが、これはあくまで修羅場である。

「さて、早まるな! ……そ、そうだ! なんなら明日好物の穂むまん買ってこるぜえ!」

「自分で買い求めますっ!」

命乞いをする子悪党のごとく和解を狙うも通じず、冷や汗が出る。大丈夫、海未はたいへん慈悲深い。ギリギリで止めてくれる。

「覚悟!」

なんてことはまったくなかった。気合い籠った勝利宣言にビビり、緩くなった我が腕を海未は簡単に払いのけ——音速まくら（通称）をついに解き放った。

至近距離からの砲弾は、コンマ何秒後顔面に不 timing した。おんそくまくら、なかなかの威力だ。誘惑好物に流されなくなったか——成長したな、園田海未。

後悔があるとすれば。

「ぎゅえ」

もう少しマシな断末魔はあげられなかったのか。

「いい天気だな」

「もう真夜中ですよ」

「明日の天気のことを占ったまですよ」

「適当に切り出したんですね」

「バレたか」

そんなこんなで決着。様々な意見交換をしたところ最終的には元通りに。

「ま、ほどほどが大事ってこった」

「そうですね」

余計な茶々入れはもうない、一度まとまれば静かなものだ。鈴虫のざわめきだけが、外から微かに届くくらい。

「なあ海未」

「はい」

「今度なんか運動しようや」

「そうですね、あなたはもう少し鍛えた方がいいです」

「ありがたし」

「ふふっ、なんですかそれ」

ふと、隣を向くと。

「明日もまた、よろしくお願いします」

改まった挨拶とともに、笑いかける海未。別に初めて告げられたわけじゃないのに、ひどく新鮮だった。

手を伸ばして、彼女の深い郡青を撫でる。きめ細かい毛が、自分の手の中で少しだけくしゃっとなった。

「っ」

「ごめっ、つい……ん？」

謝りかけて、違うと知る。慌てて布団の中に引っ込めた右腕を、海未自身の手が取ったから。応えてくれた……らしい。

……彼女のことは、未だによくわからない。
瞼を閉じているのは、眠たいからだろうか。それとも照れ隠しか。どちらにしろ訊く
のが野暮だつてことだけは、はつきりしていて。

海未同様、開かせていた目に蓋をした。

「おやすみ」

「……おやすみなさい」

明日は晴れる予感がする。根拠はない。

3. 園田海未ちゃんとのランニング

足を踏み出すたび、反動がかかかってきつくなっていく。服が擦れ、汗に濡れたシャツがあつたまつた肌にあたつて気持ち悪い。フォームが悪いからと把握していても、実際すぐ直せたら苦労はなく。

「は、はあ、あ」

極めつけには、スタミナ自体足りないという大問題。

とうにキレよく運動させられなくなった手足に続いて、ついに頭までぐったり垂れる。走る、^{ランニング}なんたるきつき。もうやめたい。帰って超低温設定下のクーラーの風に……あたるのはきつと怒られるので、控えめに扇風機を占拠したい。

「すつ、はつ」

もちろんそれは、海未がいなければの話。

柄のないシンプルなタオルを首にかけ、悠然と走る彼女は……微かに汗ばんでいるだけで、息があがつてなんかかいけない。諦めてしまえば男としてのメンツに関わる。もつとも、運動不足を指摘されて始めたこのランニングなので、今更メンツもくそもないわけだが。

「ペース落ちてますよ!」

「待つ……いやハイ」

一度スイッチが入れば容赦はないことに定評のある海未は、実に安定したペースで進む上で注意を促すほど余力を残している。

「はっ、はっ」

それでいて、どこか楽しげだ。集中して体を進ませながらも、吐息から苦痛の色はまったく感じられない。現役スクールアイドルだったときは色んな練習をしたと——海未から聞いたことがあるが、おそらくランニングもやったことがあるに違いない。本人的には懐かしくあるのだろうか。まあ推測にすぎないが。

「つてー!」

考えるうち滅茶苦茶離されているではないか。目測……いや知らん。まあだいたい10mぐらいか。

「おーい、まってくれーい」

「お断りします!」

「うおおおい!?!」

めちやくそ情けない声が出たのを深く気にする猶予はなく、なけなしの持久力を絞り出してなんとか走る。

「そのままです！」

「ひええ」

しかし海未もさらにペースを上げだして、差が縮まらない。風と勢いにちよつと流れるトレーニングウェア、そうして見え隠れを繰り返す腰。そんなチラリズムを楽しむむぐらしいか対抗手段は残されていなかった。

「どこ見てるんですか！」

「ぬーん……?!」

ぼつちり読まれてた。後方を確認せずとも千里眼よろしくしてくる園田さん半端ねえ。

「この道を抜けたら公園があります、そこまで耐えてください！」

「へあ」

「先行ってますよ！」

結局。キレッキレでキラッキラな彼女に追いつがるに至らず。海未は終始たくまし

くあつた。

「お疲れ様です」

「ありがとうございます……」

白く輝く太陽のもとをせえはあぜえはあ走り抜け、やつとこさ休憩地点。まだ折り返しだという事実を一旦忘れ、公園のベンチにへたりこんだ。海未は既に到着し待っていたという有り様である。彼女の辛い、対し蚊みたいに細くうめいたわたし。もはや何も言うまい。

運動量のみならずペースも速かった海未は、前髪が汗でふにやっっている程度で、まだまだやれるという雰囲気だ。全盛期はもつとすごかったのだからうけれど。

自分のことは棚にあげ分析していると、表現しがたい冷たさが頬に触れた。

「よく、投げ出しませんでしたね」

温度差と驚愕から思わず体をねじり不安のままに振り返れば、その正体はスポーツドリンクだった。500m程度のパットボトル中まんぱんにおさまっている。俺が追い付くまでのあいだに海未が買ってきてくれた……のだろう。

「いいのかい」

「水分は生命線ですよ。それに、そのために先回りしたんですから」

「なんだって?」

「……あ! なっ、なんでもないです」

海未、つい口が滑った模様で。すぐさま誤魔化し笑いを浮かべ、これでもかというくらい目線も泳がせるが、それでは答えを教えているようなものだ。

当然煽らない手はない。

「鬼かよと思ったりもしたがねえ。胸打たれたよ、泣いていいかい?」

「きこえ……っ?! さっさと飲む! それと鬼は余計ですっ!」

案の定。彼女は赤面とツツコミを同時にこなしてくれた。満足したので軽くごめんと返して、改め一息つく。近くの木に茂る青葉が穏やかに揺れていた。

「こんなふうにはばってちやいけなだけだね……」

「はじめはそううまくいかないものです。その中で、最後までやり遂げることが大切で

すから」

「……どうもありがとう」

「どういたしまして」

負けていられない。ペットボトルの蓋を明け、流し込む。ひんやりした甘さが喉にからみついて、すぐに奥へと抜けていった。

「では、もうひと頑張りですね？」

「あいよ」

飲むのに一区切りつくのを待って、手を差し伸べる海未に。彼女のさりげない優しさに感謝しつつ、その掌につかまった。

「ぐああああっ……」

「玄関で寝転ばないでください！」

小一時間して。

いい具合に足をきしませて帰宅するなり、おもくそぐったりしたのはまた別の話。

4. 園田海未ちゃんとのエアホッケー

何気ないことだった。たまには外へ昼ご飯でもと街へ二人で出たとき、ふと目に留まったのである。

——ゲームセンター、の壁から透けているエアホッケーの台が。

『そういやさ、一緒にゲーセン入ったこと……ないよな』

『ええ』

『一勝負だけしてくか！』

『え、ちよつと！』

ほんのちつぽけな好奇心だったのである。中学生の頃友達とやることで渦巻いたワクワク感を、久々に体感したいにすぎなかった。

そのはずが——

風圧もれるまつしろフィールドで、縦横無尽に弾ける平べったい丸弾丸を血眼になる勢いで追っている。気を緩めようものなら……

「ふんっ！」

「あ」

しまった、という言葉が喉から出るよりはやく、守護中の範囲を突破された音が抜けて。

得点。

海未渾身のショットが、加速したパックが、自分に過った一瞬の雑念を掻い潜ってしまった。

——激戦である。

「これで4—3……ですわね！」
また私のリード

下部の機体口から出てきたパックを取り向き直ると……それはそれは満面にどやをたたえた海未が。

「まだ時間は残っているぜ」

「逆転を許すとも思っているのですか？」

「さてね」

不敵な笑みを返してやると、海未はますます無邪気に嗤った。さしずめ絶頂モードな彼女。負ける気がしないって言わんばかりだ。

「だがそこに付け入る隙があるというもの！」

早口で叫ぶやいなや、スマツシャーを持つ腕をしならせ海未の自陣めがけてパックを打ち込む。脱力してこちらと対話していた海未は虚をつかれたか肩をピクリと跳ねさせたが、もう遅い。

摩擦と慣性混じりの一撃はカコキンカコキンと鋭い衝突を繰り返して滑っていき——
——しまいに細き通気孔へ侵入した。

「必殺ツ『遮りスマツシユ』」

「卑怯な!?!? しかもなんと捻りのない技名!?!」

「そりゃ2秒クオリティだからね」

「と、とにかく今のはノーカウントです!」

おかげで4—4（急襲込み）。

掲げるVサインが単なる煽りになってしまふのは悲しいものである。

「おや、半ば不意打ちとはいえ同点は焦っちゃおう?」

「なんですって……? って、乗りませんよ! ずるいものはずるいです!」

「ちっ」

そしてそこには、相容れぬ大人たちの姿があった。流れを作り出したのはわたしサイドだが。エアホッケーの台を挟んだ先には、かなりしようもないことに真剣な抗議をする海未。真面目な性分がそうさせるのだろうが、非常にムキになっているのがなんとも可愛い。

「ねーお父さん、あの二人なにやってるの?」

「あれは一種の聖戦だよ」

なんか通りすがりの親子によりとんでもないことを称されたが一興でしょう。もう一度言う、この流れを作り出してしまったのはわたしだ。海未は悪くないぶん。

「今のをカウントしてくれたらさ、昼食にデザートもつけた上でほむらまんじゅうおごるよっ。」

「またそうやって……今回ばかりはだめです！」

「ほむまんがーこだけ、だなんていつ言つたよ？ お望みとあらば2こだつて……」

「っ！ それは……魅力的な提案ですが……いいえ、私は屈しません！」

「さっ」

「さんっ……!? そっ、そこまで食欲に得点を欲するというのなら……いいでしょう。

呆れて言葉も出ないところではありますが、まあ！ あえて餌付けされてあげます」

「まいどあり。ただ、あんま食べると太るよ？」

「あなたという人はーっ!! やっぱり今のなしです！」

もう一度言う、作り出したのはわたしサイドだ。反省はしていない。

「ふふん……」

「くそつ。よかつたね！」

「正義は勝つ、ですよ」

激闘を経て。現在、鼻歌を奏でて歩く園田氏が隣にいる。負けた。残り何秒かというあたりで二点ほど追加されての敗北。すんでのところでこちらのガードをかわしての得点で、こいつがまた射られた矢のごとく鋭かった。

まあ、嬉しそうでなによりということ。ご機嫌そのままにやっところさ本来の目的、昼ご飯を食べに行く。遊び倒しているうちに結構経ってしまった、まずは時計に目を落とす。

「げ」

針の進みが信じがたく、つい変な声が出た。しかしこんなルンルン気分な彼女にこの事実を伝えろと？ 神は残酷である。

「どうかしましたか？」

不確かな上位存在に責任転嫁をしているうち、少しだけ前にいた海未が、のぞきこむようにこちらへ振り返る。髪がふわりと流れ、やがて彼女の素直に心配しているような面持ちがはつきり見える。言えない、言えやしない。

「夢中になりすぎた、ということだ」

「……………」

それきり説明はしなかった。なにしろお昼時など、とうに過ぎていて。

「ほむまん買って帰るか」

「……………はい」

考えてみれば、総計10戦ほどしては致し方なく。

真に勝利したのは、エアホッケー擁するゲームセンターだった。

なお、帰宅後。海未はほむまんを夢中で頬張っていた。

5. 園田海未ちゃんのお昼過ぎ

正午。日本が昼のど真ん中に到達した瞬間だった。

——ぐうううう……。――

低音がした。微かな地鳴り、かと思ったが違う。どこを向いてもなにひとつ揺れていない。

と、すると。

「なるほど……」

――真実が脳内ではつきりとアナウンスされるより先にわかった。間抜けさ可愛さが共存したこいつは――まるでアニメのSEだが、紛れもない人間としての福音なのだ。

求食^{腹の虫}本能。

では出所はどこから？ 自分が犯人ではない。実のところその方が良かったかもしれない。

慎重に、つい目が合ったりなんてしないようにソファアに座っている海未の方を見る。

「……………聞きました？」

やはり、というかなんというか。すでに彼女はこちらが立っているのとは反対側へ顔を背けていた。角度上耳が真っ赤なのしか見えないが、本人がどんなふうになっているのかは想像に難くない。とつても静かだったタイミングで事が起きてしまったというのがさらに追い討ちだったろう。なんてこったい。

どうするか。無論、いち良識人としてフォローをすべきだ。……ゆっくり深呼吸してから、浮かんだ口にする。

「New record!!」

「お黙りなさい！」

腹部を隠すように押さえ、海未は睨んだ。こちらの悪意なき悪意を盛大に責めたのは、遅れてダウンから解放された海未のプライドの欠片によるものとみて間違いない。

「だってさー、この間鳴ったときに12時3分をお知らせしますって時報みたくフオーしたら怒ったじゃないかよお」

「あれは悪意が丸出しだったので」

「今回は？　かつてより3分早かったことを元にもうちよいコミカルにしてみたんだが」

「ダメです……もう」

とはいっても限界か、海未はすぐに色白い綺麗な手で顔を覆った。慰めに撫でてみるも、海未はくたびれたぬいぐるみのごとく流されるように応じるだけ。いつも凜々しい分ギヤツプあつていいぞ励ますも、効果はない。前回もそうだったのだが……誰かの前で腹を鳴らしてしまうのは本人的には相当はしたないらしい。今日とて例外ではないだろう。

行くところまで行ったか、この世の終わりみたいな感じで海未が空を仰いだ。彼女の涙が外から差し込む光で煌めいて、なんだかちよつと渋い。

——普段、海未は目標や問題、使命にはそうそう打ちのめされない。いつでも全力で立ち向かっていく。

が、しようもない恥辱・敗北感といった類には滅法弱い。百戦錬磨、勇猛果敢、物腰丁寧大和撫子な海未における数少ない弱点のひとつだ。

……待てよ、わりと弱点は多い。例えばトランプのババ抜きなんて絶望的に弱い。実力は……いつも答えを表情に出してしまうほど。

「何か失礼なこと考えてません？」

「そ、それよりつつこめるとは思ったより元気じゃないか！ よかったよかった！」

「そういうえば……ババ抜き、一回たりとも勝てた試しがありませんね」

「ん？」

「無性に悔しくなってきました……」

「んんんんんーっ?？」

心なしか、ますます雲行きが怪しくなってきたように思えるのは何故だろうか。昇天でもしそうだった彼女の雰囲気、どうもギラギラしてきた。さながら挑戦者のごと

く。

「忘れてもらえませんか」

「へ」

「私があなただをババ抜きで負かした暁には……な、鳴ってしまったことを忘れてもらえませんか、と」

いつの間にか自分の額に脂汗がこんにちはしていた。海未のトランプの弱さは折り紙つきだ。

彼女は負けず嫌いである。始まつたらきつと勝つまで終わらない。蟻地獄状態一直線。すなわち終わりの始まりだ。

「とんでもない！ そんなことしなくて今すぐにも忘れますとも！」

「そんなこと？」

「……あ」

必死、回避したきは焚き付けに。自分のうっかりを自覚したときにはとつとつに取り返しつつ、証拠に海未がにっこり笑っている。増しに増してやる気満々、ブラッくな影を際立たせて。

「トランプはもう用意してあります！ ではその机でいざー！」

「ああああああ!!!」

きつとこれから、ジョーカーが海未の手札を入れ替わり立ち替わりすることとなるの
だろう。

どちらか（の腹）が、音をあげる頃まで。

6. 園田海未ちゃんとのアフタヌーン

「もう一度です……!!」

「あーもう降参。海未の勝ち!」

「シャツフルしますね」

「ナイスルーだこと」

お腹が空いたまま始まった激戦から早二時間近く。トランプを握る挑戦者と辟易な勝利者の図に逆転は未だない。

「休憩を要求しまーす!」

「……もうこんな時間なんです」

「なんなら良い子はお昼寝タイムってくらいいさ……オーケー?」

「仕方ありませんね。一時休戦です!!」

「終わったとは言わないところほんとさすが」

(また後でやることになるだろうが) ようやく中断に成功した。まだ闘志をみなぎら

せてる海未、例えるなら強キャラの風格だ。

「一度だつて勝利を収めてはいませんから……しかしながら、腹が減つては戦ができぬといひます」

「そもそもババ抜き始まつた原因それだかな?」

「ハツ……そうでした、勝つた暁にはしつかり忘れてもらいますからね!」

「……その前にな? たつた今、リベンジャーによる当の目的忘却が露呈したわけだがどうよ?」

手にあるトランプの向きを揃えるのと同時進行で、丁寧に散らばつたものも回収していく海未。どさくさ紛れて間違えた形を混ぜてやるという悪行も、彼女のまめさの前には仕組んだことすら気付かず修正される。

今日も絶好調だなという意味を込めてしらーっとした視線を送れば、受け止めた海未は何か顔についていますかねんて、実に生真面目なことを問いかけてくる。

「園田さんや。今後もそのピュアさを忘れないでくれたまえ」

「……いつたいなんの話を?」

「ラブリーエンジェルだつてこと」

「どこか打つたんですか」

「かもしれんな」

齒の浮くような台詞からの自虐にも、深読みして心配してくる彼女が愛おしかった、お片付けタイム——。

というわけで、所変わってリビング。何を食べるか会議した結果、海未の得意料理に確定しつつあった。

「じゃあ、作りますから座っててください。チャーハンでいいですか？」

「ハンバーグ希望」

普段なら特に異論はない……ないのだが、早朝に食べたのが最後に腹ペコすぎる以上、もう少しだけボリュームあるものを口にした欲が浮上ってきていた。ゆえに反逆という名の我が儘をかましてみる。気分は好物をねだる駄々っ子さ。

「夜までとっておきなさい」

「待ちな。『作ることを仄めかしておおあずけ』ってのはだいたいが果たされないというアレを知らないでも……ああいやチャーハンでお願いしやす」

「助かります」

海未には勝てなかったよ……。鬼、悪魔である。もつとも作ってくれただけで天使ではあるが。

「……明日、必ず作りますからね」

なんてひとり苦笑いしていたら、海未から小声の耳打ち。鬼のように軽やかに離れ、すつと三角巾に手をかける彼女には……。もつと勝てる気がしなかった。

「やっぱ手伝おうかな」

「いえいえ、ソファアで楽しんでいてください」

「んなこと言わず、愛の共同作業といこうや」

「あ、愛って……。もう」

と思えばこちらのマヌケな申し出にちよつともじついで、赤みの差した頬つぺたを斜めに逸らそうとする。

まったく。

くえるのか、くえないのかわかったもんじゃない。

7. 園田海未ちゃんとの耳搔き

朝食後。鳩のリズミカルな囀りに耳を傾けていた中、海未が「そうだ」と何かを思い出した。

「長いことしてないですよね」

「なにを？」

「耳掃除」

「げ……」

平和なだらけを中断、ゆらりと立ち上がる。危機感を覚えたからに他ならない。移動しなくてはやられてしまう。捕まったら恐ろしい、耳搔きはあまり好きじゃないから。綿棒に侵入されたときの、痛みともくすぐったさともつかないアレが何よりキツイ。

逃避ではない。先延ばしだ。明日への一手だ。焦るな、悟らせるな。して確実に遠くへ行け。

「海未。トイレ——行ってくるわ」

「さきほど済ませたばかりでは？」

「まさかの残尿だよオ！ 別に不自然なことじゃないよなあ!？」

「その必死さが一番不自然なのですが……」

「んじやな！」

海未が考えかけるのを遮って話絶ち切り、いち早くリビング近くから床を渡って扉を出る。幸いにも海未が深追いしてくる様子はない。露骨な立ち去りに疑問を抱いてこそはいるようだったが。しかし！　いつもみたく即刻連行されるくだりにはならない！

「ふふふ……」

閉じきった出入り口を背にほくそ笑む。これまで耳搔きにおいて、あえて海未に抵抗してこなかったことが功を成した。伏線は既に、ずっと前から張っていたのである。

さて、二階まで避難しヘルプを要請だ。ボロを出さぬようにできるだけ音を殺して階段を上りきり、ポケットにあらかじめ入れておいたスマホを取り出す。スリープ状態を解除するなり素早く電話帳を開き、時間帯的に手の空いていそうな人物の名前をタップした。

相手は——海未の幼馴染にして大親友、南ことり。スクールアイドルグループのメンバーでもある。知り合ったつてはもちろん海未。

「……………でねえ」

数コール待った先は無慈悲。忙しいってか。困ったなど、ぼーっと頭をひと搔いていたら。

——下の方から聴こえてきた。他ならぬ、ドアが閉まってたつ衝撃。

(ええ?)

心臓がホップし始める。海未が動いている。……いやいやここに上がつてくると決まったわけではない。むしろうまく耳搔きの場を抜けた、バレている確率は低いのだたぶん。部屋を出てくる理由があったら、玄関から外に出るか掃除するかくらい。

(掃除…………?)

そういえば昨日、「そろそろ二階の清掃を」とか海未が言っていた気がする。タイミン
グが被ったのか?

これは——墓穴。

……あまりSOSする相手のタイミングを想像する時間はないらしい。直感で他を当てるしかない。少し画面をスクロールさせ、次に懸ける。静まれ、小さな声で話せば大丈夫だ。

一律で乱れない呼び出しの連鎖を、息が詰まるような焦りに追われつつ二ターンほど待った末。

『もしもしっ?』

「ナイス!」

勝利の女神は光のレールを敷いてくれた。相手は海未の元後輩& a m p ;スクールアイドルメンバーの……

「星空さん! 私だよ私。急で悪いが、折り入って頼みたいことがありますね」
『……なんとなくだけど、助けない方が良いような気がするにや』

星空凛である。すつきりした橙のショートヘアにしなやかな体躯と身軽さが特徴的な、そして語尾に「にや」をつけることがある猫みたいな女性。電波の先にいるから今はその姿を拝めやしないけれども。

「早速だけどね、ちよいと匿ってもらいたいんだ」

『……凜の話聞いてた?』

「追われているのさ」

『はあ……』

親睦は南ことり同様、海未繋がりで深め。つまりワンチャンス助けを乞えるであろう一人なのである。

「事態は一刻を争うのですよ。すべてを今説明するのは困難だがね、具体的には……海未からの耳搔きを回避したい」

『丁重にお断りさせていただきまーす』

おそらく彼女は我が窮地に共感し、手を差しのべてくれるだろう。助かる、耳搔きをせずに済むのである。

「つてまてい!？」

『惚気話は受け付けてないにやー』

うっかりスマホを落としかけた。まずいまずいまずいまずい!

「そうじゃない、どうか是非——つか絶対その通話終了ボタンを押さず留まってください

いやがれ」

『語尾がすごいことになってる……』

「君が言うか」

『やっぱり切るね?』

「とてもチャーミングな添え語尾かと星空様!」

たかをくくっていた。他にあてがないわけでもないが、ここを断られたらいよいよ猶予がない。乗り気とは程遠い星空氏を説得しようと、全思考回路をフルスロットルさせる。

ただ、彼女による予想だにしない却下（当社比）に戸惑うあまり、慎重に払い続けていた周りへの注意が乱れた。

「ね、5分でもいいから!」

『えー』

次第にヒートアップしていく自分のポリウムにも、

「お願いです!」

『うーん……』

階段をひとつひとつ進んで響く小さな軋みも、

「星空さアん！ あなたしかいない!!」

『あーもう……わかったわかった。今日は夕方から用事あるから、来るならできるだけ早くね?』

「っしやあ! 愛してるぜ!」

部分的に聞いては誤解を生みかねない言葉を発している時に限って、自身の背後に誰かが到達したことも。

「楽しそうですね?」

右肩にポンと手を置かれて初めて、マイ警戒はお暇するのを止めた。やたら鮮明に、明るくもドスが効いてたまらない声色が届いたことで。

なるほど、南無。

おもむろに通話終了ボタンを押し、深呼吸して振り返る。すぐそこに、彼女は立って

いた。よく知る人物海未が立っていた。

翳りある満面の笑み、試しに二歩後ろに下がってみるも彼女は一切動かない。……いけるか？

「まあ、な？　ところで二階の掃除か？　ほんじや邪魔者は下で待機するとして——」
ならばとぼんやり流しつづ、自然に海未の横を通りすぎ……

「いいえ。先に耳搔き……でしたよね？」

「あ、ああ。そうだったなうん」

られなかった。再び肩を掴まれて。しかも地味に力が入っている。依然につきりだ。
「そしてその前につ!!」

「はい……?」

「『愛してるぜ』とは、どういうことでしょうか？」

やんぬるかな。細く見開かれた眼差しと、下がりながらも固く結ばれた口元が海未を彩って。

「説明を……!」

「うわああああああ!!!」

迫真の『違うんだ』は、断末魔として天井から世界へと抜けたのだった。

「はじめからそうならそうと……」

「言っただよなあ」

零れ陽差し込む部屋には、膝枕という極上のシートに頭を預けた元浮気者容疑者ぼくと、綿棒片手に暴走する気などなかったことを表明する海未。

押し問答、誤解弁解を経て紐解いた結果事なきでした。顔面脇に紅葉を残した以外は。

「かゆくないですか？」

「実にかゆいね、とても」

「もう終わりますから、あと少しだけじっとしててくださいね」

「……へい」

相変わらず耐え難い拷問だ。が、それ以上に色々必死こいた疲れが襲ってきて眠い。時間帯的に暖かいのが拍車をかけている。墮ちるつもりはないのに、つい瞼を閉じてしまふ。

……何も無い。ただでさえ膝というスペースを埋められているのに、挙げ句仮眠までするのを海未は形容してくれるらしい。耳の中を掃除し続けてもらう中どんどん昏くなる意識なりに、感謝した。

運が良いのか悪いのか、完全にぐっすりする前にひとつ気が付いた。柔らかな圧力が、頭を擦っているようだ。なんとか眠気に抗って、ほんの薄目を開ける。

「いつも寝坊助なんですから」

ちようど独り言を溢す彼女を見た。端に映る影はきつと――。

ああ。殊更睡魔にやられるのはそういうことか。どうりでか、納得した。

と、急にのしかかっていたものが離れる。働かない頭でどうしたのかと推測している
と、ほぼ閉ざしている視界の先にあたふたする海未が。

「……み、見ました？」

なんとたまたま捉え合ってしまったか。ちよつと上体を退いて震え声で問う彼女は、
うっかり耳搔きする手を止めてしまっている。

息を呑む海未に対し、口角だけ上げて応える。すると意味を察したか黙りこくつた。

「……もう耳搔き、できないでしょ。代わろうか」

「結構です」

「違う違う。たまにはねってことで」

「絶対悪戯するに決まっています……」

「そうだよ」

「いい加減にしてくださいっ！」

最後は拗ねたように、だけど丁寧な海未は溜まったものを取り除いていく。

「……………その、あ、後でお願いします。やはり一人ではやりにくいので」

「承りましたよつと」

「変なことはなしですからね？」

「わかってるって」

それでもくすぐったいものは、くすぐったかった。

8. 園田海未ちゃんとの土産作り

人間、幸せでありながらも波穏やかな日々が続くと刺激が欲しくなるものだ。じゃあ如何にして打破するか、たいして考える気があつたわけもなく、雲だらけの海を着にティータイムと洒落混んでいたのだが……おかげさまでその小休止が閃きの電流を走らせてくれた。

「ねえ海未さんや。『お茶する』といえはカフェだよな」

「……そうですね」

「カフェという枠組みの中には、メイド喫茶があるよな」

「変な企みでもしてます?」

「ははっ、まあ聞いてくれ」

洗濯ものをたたみながら早速すべてをぶつたぎろうとしてくる彼女に脱帽こそするも、決してごもらず前置きを口にする。

「ときにさあ。メイドさんっていいなと」

「出会った頃もそんなこと言っていましたね」

「ああ。てきぱきと仕事をこなす姿勢はもちろんのこと、特にメイド服を纏ってるのがいい」

「後半が本音ですよね」

「いやー、かつては通ってたからねお恥ずかしい。鼻負気味なところはあるかもな」

「今でも時々出向いてますよね？」

「と、いうわけで！」

「スルーですか。………まあそれについては後で詳しく聞くとしましょう」

眉を潜める園田さん。悲しいかな、その程度では怯まないのだよ。意志は固い。

「是非、園田大先生にはなってもらいたい。一日我がメイドに——」

「む、無理です！」

「よーし白紙に戻そうじゃないか」

海未の、人形のように綺麗な顔が赤く染まったのを見計らい、素早く撤回する。大事なのは頭つから了承してもらおうのとじゃない、彼女が一瞬、自身のメイド姿を浮かべる

「ここぞ意味がある。」

「何故か？ 不本意な妄想をしてしまったと、恥じらい悶える彼女を拝めるのだ。最高じゃないか。」

「では、ご馳走いただいたところで。」

「気持ちはよくわかったよ海未」

「おや、あつさり諦めるんですね」

「まあね。嫌がつているのになつてもらうのはどうかと思うしな？」

「白々しい……」

「作戦実行——。」

「さあ園田海未よ、翻弄されるがいい。清楚な奉仕天女を一目見るべく捻り出した渾身のアイデアでな！」

「だからなるよ、こちらがね」

「はい？」

「もちろん、奉仕する立場に」

「あなたがメイド服を着るのですか……？ ま、まさか！ そういった趣味が……」

「待ってくれ違う」

「いや流れからしてメイド路線で解釈できなくもないが絵面的にまずすぎる。どうか」

距離をとらないで園田さん。ああ、願うも虚しく一步下がったぞ園田さん。とうか想像しない方がいい、たぶん体に悪いよ園田さん。

……必死に弁明すること一分、なんとか彼女の誤解を解くことに成功した。

「というわけだな。普段色々お世話になつてることですし、たまには君の執事でもやらせていただこうかなと」

「……あなたがですか？」

「ひどいっ!」

道は険しきかな、心が折れそうだ。決して容姿方面じゃないよな! きつと家事スベックについてだよなあ!?

現場で起きているオーバーキルなどを存在しなかったかのよう、さらに海未は指摘した。

「いえ、持っていないのではないかと」

「え? 何が?」

「執事服」

「……………」

「ジャージでもいい？」

「いつそ清々しいです」

かくして。妥協はあれど、執事大作戦は決行に至った。

「お茶を淹れましたよ。さ、どうぞ」

「い、いつもと雰囲気違いすぎませんか？ なんだかこう、くすぐったいのですが……」
ほら、海未が目を逸らし、そわついている。照れてる照れてる。

「何をおっしゃるのです。今限定とはいえ、私はあなたに仕える身。忠義を尽くさずして執事に非ず……うわつやべえ溢した！」

「余所見するからです！」

最初はいくらか不安だったものの、

「部屋の掃除はお任せください」

「できるのですか？」

「こう見えても私、学生時代は掃除当番において丁寧な仕事をする、数多くの先生方にお褒めいただいたものです」

「そうですか……。では、お言葉に甘えて少しくつろがせてもらいますね」

「ありがとうございます。塵一つ残さず、さながら新築のような仕上がりに見せましょう。さーてまず掃除機を……。あれ……。掃除機はつと……。……。どこだ？」

「向こうの押し入れの中ですよ」

「あ、あはははー。わわわわかつてますともー！」

いざやってみればそりやもう余裕綽々で、

「肩——お揉みましようか？」

「お、お願ひします」

「……上から見てもすげえ鎖骨綺麗だなあ」

「やっぱり結構です！」

「アッ！ つい素が！」

「つゝゝ！」

とつても上手くいつている。

最初は呆れていた海未だが、すっかりたじたじのメロメロなご様子だ。やったぞ。

奉仕とは素晴らしいものだ……………。

「ちつくしよう！」

膝をつくにや十分すぎる体たらくでして。みよ、なんだかんだ温かく見守っていた海未も、とうとう片手で額を覆っている。なんと虚しいことか。せめて格好だけでもそれっぽかったらうまくいっただろうか、外の窓にいつしか張り付いていた蛾に訊いてみたくなるくらいだ。嗚呼無情。

「でつ、でも！ あなたの真心は伝わりました。すごく嬉しかったですよ？」

あやすように海未が肩を叩いてくれる。慈愛に満ちるあなたは美しいが、残酷な追い

討ちでしかない。

「もう執事なんてこりこりだぜ」

「慣れないことするからですよ……。さ、そろそろご飯作りますから、あなたは休んでいてください」

「ん。悪いね」

お言葉に甘えて腰かけ、開けた窓際に注意してみれば確かに外は夕暮れだ。奮闘している間に日が落ちんとするところまでできていたなんて、感心と似て非なる脱力感を抱いてしまう。

キツチンにて、手を洗い終わったららしい海末は既に食材に包丁を入れている。ここからじゃほとんど後ろ姿しか見えないけれども、きつと横顔は想像以上に静かで、あたたかいのだ。

メイドどうこうじゃなくなつたって、何気ない日常でもまた彼女は映える——ふとした瞬間を目にしては、ときたま思う。

「ん？」

メイド……？

「そうだよ！ そうじゃなかった!!」

ソファアールからぶつと飛び上がる。執事ぶつて奉仕する先に目的があつたことを。渾身のアイデアの結末を。

「海未さんやい!!」

「……何ですか、さつきから声を大にして」

「出番でつせ!」

自分が奉仕する立場執事そのものを実行してから、訴えかける……さすれば海未がメイド姿になってくれるのではないか。大本質は忘れちゃいけない。身体を張ったギブアンドテイク! いいえただの同調圧力。

でもほら海未が手を止めた。さあ、満を持して——

「お断りです」

「あふん!」

あつれー?

「うゝあゝあゝ」

再度崩れ落ちる解雇済ジャージ執事と、ゴミでも見るような視線を送る園田海未ちゃん。……え? わりとご褒美なんじゃ?

「当たり前です。あの流れで私が着用すると思つたのですか？」

悟りを開きかけているのを知る由もなく、正論をぶつけてくる海未。くそつ、これじゃあこつちがただのバカみたいじゃないか！ あ、馬鹿か。

しかし簡単に諦めつくほど、海未のメイド姿はありふれた物じゃない。ならば究極のカードを切らせてもらう。

「でも、高校時代に着たことあるつて。だから必死にお願いすれば可能性あるかも、つて君の幼馴染がな？」

「な、何故知つて……!? まさか……」

一転。彼女は前のめりでの説教体勢を崩し、畏れるように身を引く。ほぼ見当はついた模様だ。ではせつつかくなので、あたかもそれらしくドヤ顔させてもらう。

「ああ。——南ことり先生だツ！」

「ことりつ……あなたはなんということを吹聴して……」

虚空を眺めくらりとする、ミスメイド服お断り娘。どこかトラウマじみた反応、かつても可愛らしい策略に幾度と嵌められたことが窺える。

いいぞ、かなり海未ちゃんはなかなか参っている。あと一押しすればメイド服を着て

もらそうだ。

フリッフリなヘッドドレスと、落ち着いた蒼とのコントラスト。白黒ばっちりのゴシック可愛い服に圧倒されつつも健気に対応するビューティフルアロー。もう何言ってるか自分でもわからないが既に天国目に浮かぶ。

「あれ? ……ちよつと待つてください。あなたはいつ、ことりからその情報を得たのです?」

「みたいな具合で、非常にハイだったの。ゴールは目前だと、1、2秒。達成感に限りなく近い喜びに思考を手放していて。

「え、いつって、この間メイド喫茶に行った時さ。バイトでことりちゃん出てたんだよ」
「へえ……?」

内容をなんとなくで捉え、無警戒にいつものノリで答えてしまった。

「そんな時に色々訊い……あつしまつ、うんいや友達友達がね?」

「そうですかあ」

さぞ楽しかったんでしようね、と海未が微笑む。すごくにこやかである。オムライスを注文し、オプシオンで「あーん」してもらったとか言えない。

「あーん、ですつて?」

「読心術?」

「顔に書いてありました」

「すげえな」

さてさて。すげえなじやなくて、ちよつとメイド服どころじやなさそうだ。

「そこに正座してください?」

「はい」

問答無用、でなくても即答。無事お灸を据えられましたとき。ちゅんちゅん。

「ぜっ、絶対に着ません！」

後日、クローゼットの前で何やら海未が叫んでいた。

9. 園田海未ちゃんとのレイニーデー

土砂降り、かたつむり 蝸牛蠢きそうな湿気。

どんより曇天と攻撃的的雨粒による弊害は如実にテンションへ影響してくる。

「すごい雨……」

およそ半分くらいは海未も同じ感想らしい。物憂げにカーテン越しを眺めて、眉を曲げた。

「開き直って散歩とかしてみる?」

「さすがにびしょ濡れですよ」

「相合傘すれば心はホット」

「そんなことだろうと思いました」

普段からこちらのアホさ加減にお呆れになっている園田氏、一段と塩対応である。やはり悪は憎き雨。てめえのせいだ、逆恨みだけど。

「すごいアウトドアってわけじゃないから別にいいんだけどさ、コンビニ行きたいときとかだるすぎる」

「しょうがないじゃないですか。人間、自然には逆らえませんか」

おっしやる通り、現状を打開したいと考えたところで覆せない。海未は海未で本を読み始めたし、構っていただけない変態野郎は変態野郎なりに羽をのばすとする。籠る時期も必要かと受け入れておこう。ただ――

「二人で一緒に出掛けたりできねえのが、一番辛いなあ」

「……でも、私はずっとあなたの隣にいます」

「さうつとかつこよすぎやしませんかね？」

ほつと出の陳腐なる我が口説きに、本に目を落とすまま彼女は返してきた。表情ひとつ変えず実にナチュラルに。

……いや、どうやら本人にとって、うっかり口をついて出たものらしい。証拠に彼女の視線がページの中心から右下に逸れていつている。

「ふ、ふふ……誉めても何も出ませんよ？」

なにやら笑ってごまかしにかかっている。とことんポーカーフェイスに向いてないガール代表園田は、堂々やり過ぎすつもりのようにだ。

「つたく、ますます惚れちゃうね」

ならば、こちらに悪戯心はいらない。さながら女神のような彼女を立てるのみであ

る。

「なっ……」

次をめくろうと動かした海未が硬直する。

園田海未ぞつこん太郎は曇りなき、シンプルな本心を告げたまでなのである。ええ、いつもみたく反応を楽しもうなんて、邪な感情はまるでない。

「元氣出てきた。空は暗く阻まれているのに、心はすっかりカンカン照りだ」

「い、いや、そんな……私は恋人としてとっ……当然の励ましをですね——」

パサリ、と海未の手から本が床へ落ちる。両の手をぶんぶん振る先に見切れる耳は本人の体温上昇を知らせていた。

園田海未さんが放つピュアっぷりにはつい照れそうになるものの、今押し黙ってしまつてはかえつて気まずい。

彼女の座る椅子まで、いや顔と顔がぶつかりそうな所まで——接近する。

「海未」

「は、はい」

映り込んで、光彩と光彩が溶けた。

雨の音がより強く聴こえるのは、気のせいではないだろう。窓は雨垂れの露が沈黙が流れて、滲む湿度は詰めた距離からか濃く肌を刺激する。

「——つ、散歩行つてくるわ」

離れ、無意識に閉鎖していた呼気を開放する。

やべえ危なかった。乗った雰囲気にかこつけてかっこつけようとしたのに、海未と向かい合ったら色々吹き飛びそうになった。今のへたれは正解だと、強く思う。

「わ、私も行きます」

「いやいいよ濡れるから!」

「傘を共有すればいいじゃないですか!」

「さつきと言つてること逆ウー!」

「あなたこそしゃんとしてください! ほら、いつまでも照れてないで!」

「照れてねーし！ あー寄るな！！ 今はマジで近寄るんじゃないぞいいなア……」
「嫌ですくつつきますー！」

結局はギヤーギヤー揉めるといふのに。湿気にあてられるばかりに熱極まっ
てしまふ。

これだから、しつとりする日は苦手なんだ。

ボツ話／番外編

—1. 園田海未ちゃんとおしくらまんじゅう

乾燥。悴んで曲がりにくい指先を、ダメ元で擦る。……たいして効かない。圧倒的低温は屋内だろうが極寒を生み出すらしい。我々の住居は東北地方でもないのに、なんでも外の気温はマイナス数度とか。

「昨日以上ですね」

その威力ときたら、つい最近まで「体が鈍りがちな季節だからこそ」……なんて息巻いていた海未の強い心すらをも若干折っていた。

トドメは灯油式ストーブ棒が故障したことである。しかも、冷え込みのひどい今日に限って。まあかなり古いやつだったからあれだけど。

「買いに——」

行くか、と提案しかけて言葉を引つ込める。そんな安易に突っ込んでいけるものだろうか？ いいやいけない。

「しかしこのままでは……」

彼女が唸る通り、現状を変えなければ震え続けるしかない。食事——は、一時温まる

だけで効果切れも早い。こたつ——ああ、そこにあればよかったのにな。引越す時に海未が運んでくるか訊いてくれたが、「そんな大きいものめんどくさい」とか突っぱねた己を粛清したい。

一応エアコンの暖房モードを展開してはいるが、微妙に氣力を削ってくる肌寒さは未だ拭えず。万事休すなのか……？

「やはり覚悟を決めて、動くしかないのでは？」

「あーそうだねえ。買いにいくかねー」

ぬるい風が当たる位置に逃避がてら陣取っていたら、いつの間にか防寒具を羽織った海未が外への突撃を促してきた。ちよつと目をキラキラさせている。察するにまあまあ積もってきた雪を眺めるうち、一周回って高揚してきたといったところか。確かに雪が首都圏を染めるのは久しいことだが……。

「決まりですね！ さあ行きましょう！」

「んあーちよいと待って準備するでえ」

「あの、寝転がった様にしか見えないのですが」

「こうすることで出かけるだけの力がどんどん湧いてくるんだ。溜まるのは5年後くらいかな？」

そう。玄関方面を指差す彼女と、爺さんのような口調で気だるく返す氷点下の奴隷と

には明確な温度差があった。

「往生際が悪いですよ！」

「うぎぎぎぎ……」

「立ってくださいく!!」

「いゝやゝだ あゝあゝ」

「はあ……はあ……」

「ぜえ……ぜえ……」

「じつとしては寒いままですよ！」

「ぐおおお、寒くてなになが悪いんだよおおお」

相反する二人の戦いは加速。やがて痺れを切らした海未がとうとう最強のカードを切った。正論をかます。その通りすぎて、結果こちらは見苦しい言い訳しか返せない。——元々だって？ ほっとけ。

とはいえ、もがけばもがくほど行きたくなくなってくるばかり。ささやかな抵抗は続く。

「動きさえすればいいんだ、外に出ていかなかたつてじつとしてなきやいいんだ……つ!?」

そうしてばやいたところだった。天啓が下りたのは。

「海未」

「やつとその気になりましたか」

「ああ、動こう」

すぐにでも実行すべく、意気揚々とした返事をするともに海未との距離をゼロまで——互いの体の側面が触れる地点まで詰めた。

「……あの、なぜくつつくのですか？」

「あたためあおう」

逮捕レベルな口上なのはともかく、とつても真面目に切り出す。いまいちピンときていないらしい海未は、突然の大接近にやや不快感に（「やや」とつけたのは我がメンタル予防線）顔を歪める。が、めげるつもりはない。

「回帰ってやつかな？ 今しがた……もはや遠い昔に忘れ去られたと言つても過言ではない、幼少の伝統を再び興そうと思いつた」

「えっ？」

「フフフフ……」

まだ察しがつかず、素で首を傾げる海未。間を持たせるため適当に笑つてごまかすものの、早い所彼女にはハッと気付いていただきたい。無駄に格好つけた分恥ずかしいか

ら。

「お、おしくらまんじゅう」

「……なるほど」

微妙に気まずい雰囲気にならなくなったので降参気分のまま小声で告げると、海未は神妙な面持ちになり、やがて俯いた。前髪が瞳を隠したことで感情が読み取れなくなる。

長い沈黙が流れる。さすがの海未も心底反応に困ったのだろうか。あるいは、呆れのあまり物も言えなくなったのかもしれない。今更ながら撤回したくなってくる。普通人になつたらやる機会などあるまいて。おしくらまんじゅう。

そんな焦燥の果てに、一際背中辺りが冷え冷えしてきた頃合いだった。軽くふらついた。目眩かと頭を押さえてみるも、ぶれる視界の先で原因の正体を知る。

ぐつ、と弱く。けれどもしつかりと反対方向から、熱のある力が体の側面を押してきたのだ。

……少し考えて。今のが現実だったのかどうか見定めるべく、こちらからもおそるおそるやり返してみる。かけた重力は彼女の着る防寒具の膨らみを潰し、人間的な柔らかみへ到達したのち、温もりある摩擦を起こした。

すると、また即座に力が触れ合つた部分から加わる。一度目より強く。弾くように、かつ拮抗するように。

我ながら鈍いもんだ。さっきの沈黙はああそうだ、イエスのサインだったのか。何より確証は、海末の頬が示している。

「その手がありましたか……!」

うつきうきになつて緩みきつた彼女の頬が。暖をとるといふよりは、大義名分を得たようなニヤつきは、どこか悪戯っぽい。

「いくぞー?」

「いつでも来て下さい」

「せーのっ」

「おしくらまんじゅう押されて泣くな! おしくらまんじゅう押されて泣くな! あんまり押すとあんこが出るぞ!!」

提案者であるこちらはもちろん、海末自身も臆気な幼年期以来だつたに違いない。押して返しての応酬は、ひどく拙くて。

「強く、お、押しすぎですっ」

「そうか? 海末が……っ、うおっ、はしやいでるんじゃないか?」

「本当に、っん、久しぶりですから。だいたい、そういうあなただつて!」

でも今日はそれで良かった。彼女の過ごしたかつての冬景色を、垣間見たような気がするから。

「うおおいやめて倒れる強い強い！」

「ふふっ、だいぶあたたまってきましたね。ここからが本番です！」

「遊び方違うからあああ」

群青の満開を味わった、そんな真冬の日だった。

後に思いきりバランスを崩して苦笑いを交わしたのもここだけの話。